

創作會話

(村の思出から)

高木隆立

三三

「芽出度いよで貴方は濟ませるの？」

「濟せるかと云つても他人の僕には何の關係もないぢやないか」

「關係がない？」

と急に花代の眼は何か探求せずばやまない様に強く光を持つ私は出来るだけ冷淡な態度で

「そうさ赤の他人様だからね」

「他人だつて！まあよくも云へた事ねどの口からそんな事が云へるの薄情な方ね！」

「オイ／＼／＼薄情者呼りは許してくれ高が知れた小學時代の同級生に過ぎんぢやないか」

「でも貴方だけは春江さんを唯の同級生だ云ひ切つてはゐられないはづよ」

「何を？何んだか僕には解らんね」

「解らんなんて人を馬鹿にしてゐるはね、この

間村に歸つた時でも春江さんの御家へ遊びに行つたら春江さんがね、仁三さんがK市で久雄さんに會つたと云つてゐたから必つとK市にゐるのよ貴女は知らないかと云つてゐたから妾は今では知らないけれど分つたら御通知するはと云つてゐたのよ」

「そうかね久雄は久雄でも人違ひだらうよ僕にはそんなに尋ねられる譯がないからね」

「人違ひだなんてよくも白ばくれてるのね」

と彼女は眞劍に追究してくるし私はもう過去の一夢と記憶から抹殺しようとする思ふてゐるので春江の問題で會話したくはなかつた、けれど若し私が折れなかつたら彼女の確實なる見聞で何處まで、も推究してくるであらうから私は遂に

『そうね、僕が人違ひだと云ふたのが悪かつたら取消しもしやう、又よし人違ひでなくとも五年も七年も會はねば他人様だよ、過去の事は過去の事さみんな清く濯ひ流して全べては何もなかつた昔の事としてもう春江の話はやめよう又實際は君が色眼鏡で見えてゐる程度のものでないのだから……』

『貴方は男だからそんなに簡単に濟せても春江さんが承知しませんよあの方は大變な意氣込みでね一度會つて言はねばならぬ事がある、又聞かねばならぬ事もある、それが濟むまでは例へ結婚の日を延しても妾は會うなんて言つてゐましたよ』

『では何か僕に恨み言を言はねば虫が納まらんとでも言ふのだらうが然しそれならワザ／＼面會する必要もないよ、當方では懺悔してゐるのだから充分恐縮するからね』

と私が優しく出ると彼女は何んだか變な面持ちで袖をもて遊び乍ら

『でもね、貴方が懺悔するの恐縮するのと並べ

立てゝも春江さんにして見ればその貴方の顔を見てその大きい目から涙でも出るのを見なければ承知ならんでせう第一貴方が當にならない風來坊式に出來た男なんですから、その點は妾だつてあの方に充分同情しますわ』

『馬鹿なこの佛頂面を見て恨み言百萬だら並べたとしてそれが何になる、この無機用な目から涙が一滴や二滴出たとしてそれが春江自身に何になる、まさか僕の涙で春江の新しい道が生る譯でもなしね、止さう／＼そんな話なんか何時まで續けても駄目だよ、それより今君は何處に居るの』

と私は春江の事を吐き出す様に言切つて話題を變更し様とすれば

『あの妾の事？そんな事後よ上手に話をそらさうと思ふてほんとに油斷が出來ないわそれより貴方こそ何處にゐらつしやるの？』

『僕の事かいオイ／＼先の問ひに答へずに質問するなんて無禮ださうだよ、誰か、云つてたよ』
『いやだわ、すぐ上げ足取るなんてでもね時と

場合によつては關わないのですよ」

「先と同じ場合だせ」

「イ、エ大違ひよ」

「いやもう君の様な相手に係つた僕が不幸さ男らしく言ふて了おうK市だよ」

と私が不得要領な返事をするのですが彼女も不満さうな口吻で

「Kは云ぬかて分つてますのよK市の何處？」

「然しそれ以上委しい事を聞いてどうする」

「どうするつて？分つてゐるぢやあゝりませんか國のあの方に言ふてあげるのよ」

「そつだつたのかではそれ以上僕も云ふまい」

「云ふまいなんて男らしくもないわ今先言ふなんて云ふて置きながらそれは卑怯よ！」

「卑怯だと云はれてもいゝ、僕には何んともないんだから」

と私ますます／＼冷淡に出るので花代も不氣嫌さうにむつちりとしてしばらく私の面を見注めてゐたが何を思つたのかニツコリして又樹枝の間からもれてくる電燈の光を追ふ様に目を働かし

てゐたが急に

「分つたわ云はない譯が分つてよ……………若し春

江さんが來たら怖いからでせう！」

「いや別に女一人位に怖くはないよ」

「ではなせ云はないの……………」

「必要がないからさ」

「貴方になくても此方にあるのよ若しどうしても云はねば妾従いて行くわ」

「フハハ……………エライ險幕だねまるで五尺の男

が女一人に逃げてゐる様に聞けるね」

「ほんどでなくて……………嘘だと云ふ元氣が有つたら住所をお仰しやい」

と女は威大氣になつて私の下から出るのに對してのしか、つてくる様に云ふので私は軽く受け

流す様に

「オヤ／＼脅迫じみて來たね」

「そう當り前よ誰だつて眞劍になればこうよ」

「まるで君の事の様だね」

「誰の事だつてそれこそお節介よ貴方は勿體振らずに處さへお仰しやればいゝのよ……………何處？」

と私の態度に反比例して彼女の態度は増々熱を帯びるので何を女の俠性で言出すかも知れない私の心は多少不安な動きがする

『よしそれでは僕が胃をぬいで云ふよYだよ郊外のYの伯母の宅に居るよ』

『Yの伯母さんの宅に………では學校へ行つてゐらつしやるのでせう?』

『行つてるよ、これこそ御世話様だ、然し春江に僕の處なんか通知してはいかんよ困るから………』

『困つたつて知らない事よ!』

と彼女はつばなす様に云ひ終つてツーンと澄し
てゐる

『いや僕が困るのぢやない實は………』

『イ、エ貴方が困らねば相悪く他に困る人がな
くてよ』

『いよ〜薄情に出て來たね、そんな事知つた
ら春江自身が困るのだが………ではその一件も
僕が旗を捲く事にしやう、然し君は今何してる
のか』

と彼女の問題にふれ様とすると花代は急に顔を曇らせて調子よく出來た面の筋肉の間から小さい目を丸くして

『妾は今女優よ』

『女優さんか派手な職業だね何處の?』

『Mプロダクションに勤めてゐますわ』

『Mかね、あそこも近頃随分發展したねどうだ
所謂つきのスターの生活も面白いかね?』

『面白いと云つてもね他人様の思つてゐらつし
やる様ではなく實際は苦しいものですわ。あの
表面の粧ひは内面の苦しさを包むヴェールなん
ですもの………』

とシンミリした言葉付で自己の職業を深く内省
する様な目付で答へる

『苦は一切につきものだよ』

『でもね私達は肉體的にも精神的にも苦しいん
ですわ、やれロケーションだの、夜間撮影だの
と云つて晝間に充分費ひ果した勞力を又餘分に
しぼられるんですもの昨日だつてスタディオで
ダンスホールのシーンの撮影の時に道具方の不

注意の爲に欄干が落ちて来て妾の耳に當つて一時はつんぼになるかと思ひましたわ』

『そんな事なら労働者は毎日だね』

『だつて職業が異なるしまして妾達は女ですもの』

『いやそれは君の考へ方が誤つてゐるよよしそれが男性であらうと女性であらうと生きたる云ふ目的の爲に選れた職業なれば皆一蓮托生さでもね單に生ると云ふ目的のみでなく偉大なる藝術を生み出さうと二重の目的を持つ者も倍の勞苦は當然忍ばねばならんね君がそれ程苦しく思ふ仕事をして何程の報酬が與へられるのだね？』

『報酬！それはお恥しい位よ月に僅か四十圓』

『いゝぢやないか家庭を持つ堂々たる男子でも三十圓位の月俸に満足してゐる人もあるのだから……………』

『だつて妾達の生活には足らないのですもの』

『足らん！女一人が四十圓で足らない？』

『どうしても月給の倍額は入用ですわ』

『どう云ふ方面に使用されるものかは知らないがそれはちと過ぎるね、然しその不足額はどうするかね眞逆親からも取れまいし……………』

『だから苦面するわ』

と彼女は云ふべからざる事でも云つた時の様に不快さうに私の顔を見守つてゐる私は彼女達の生活の内面が如何に腐敗してゐるか又彼女等それに對してどんな必持ちであるかを知りたい爲に充分追窮する心で彼女に細かく質問する

『苦面か君等の苦面なら實際の苦面だらうね』

『そら苦しい事の連續だけだ……………』

と淋しさうな表情の中には實際自己の秘密を告げる苦しさや懺悔の爲に告白しやうとする良心の争闘が明らかに示されてゐる、その苦しさをな彼女の心持に對してより以上の追窮は私としても苦しかつた、今彼女が如何なる暗い秘密を持つ女であつても私に取ては忘れる事の出来ない印象深い小學時代のクラスメートであるのだよし今の先まで私の古傷を洗つて私を苦しめたにしても可弱い女性に對して私は今となつてそ

の秘密を求めぬ事は出来ない唯彼女の自發的告白を待つより他に道がないのだ、彼女も二の心の働きの勝敗を待つてゐるのか容易に次の句を出さない二人の間には自然と沈黙が續く、今彼女は闇の中で戦く胸を抑へて決斷を仰いでゐる静かな風は時々木の葉を動かしてゐる晩夏の夜の氣分はもう充分迫つてゐる、シットリとした夜露が今にも下りきうな氣分がする、花代は心の争闘を待つ事五分間位であつたようやく決心したのが小さい聲で

『貴方だから云ひますが表面のあの華やかな生活をする爲には闇の中で接吻でも賣らなければ………だから一流のスターだつてパトロンの二人や三人は持たねばやりきれませんのよ』
と彼女の態度は急に静まつて來た、私はその可憐な小羊の様な女が虚榮の爲に拂ふ犠牲が如何に偉大であるかを知る事が出來た、それは浮話か巷間談位ではない秘密の本人が告白してゐるのだ、でも私はそれを單に受け流す事が出來なかつた

『だから君も持つてゐると云ふアイロニーかね』

『いやだわ久雄さんたら………』

と如何な彼女は恨めしさうに私の言葉を打ち消さうとするそれに對して私は反抗する様に

『でも君だけは闇に握手したパトロンでなくて共鳴し合つた天下晴れての戀人だらうね』

『アラ！人を馬鹿にしてゐるは何んなと御隨意にお仰やい………ほんとに貴方も食わなくなつたのね』

と私の言葉を恨む様に言ひ返す

『食へないのは君の方だせ』

『あんな優しい田舎娘の春江さんを振る人はよく食へますからね』

『やめて呉れよ、又春に逆もごりか、僕には唯親しい友に過ぎなかつたのだから………』

『正直に辯解する所から見ればやはりそうよ』

『もうどうでも春江の件は君の自由解釋に二任するさね、然し君は苦しいとかみにくいと考へてもそれ以上突き進んで積極的な考を持たな

いのかね？」

『そう妾だつて藝娼妓にも劣る、いゝねもつと深刻な虚偽の生活からは一度脱しやうとも考へて見ましたが妾達の様な無智な者には適當な職業もなし又世間からは泥人形の様に取り扱れるのですからいつそ泥なら泥の生活で無智な享樂的な生的を續げ様と考へ直したのよ』

『そんな事は考へ直す必要はなかつたのに……』

『お茶を入れてはいやだわ眞面目の話ですもの』

『いや僕が悪かつた清聴しやう』

『それでね妾もこの肉體は救れなくとも心だけなど眞實に生きたいと思つてクリスチャンになつた事もありましたが結局又元に歸りましたあんな淺薄な而も形式的な神の愛だの天國だのと言はれても實際妾は救れませんが……』

『いやそれも君が悪い、救れたいと心から熱望して理論は抜きにして神に縋らねば神も天國もないよ』

『でも妾は心から神を求めて祈つたのですよそ

れでも結果が無駄だつたのですものこれから考へて見ても妾達の様な心の荒びた生活をしてゐる者に取つてはありふれた宗教なんではとても救れませんか』

『それも君が誤解してゐるよ宗教は人の物ではない君の物でなくてはならない、君と云ふ一個の人間を中心にしての炎ゆるが如き信念によつて形成された物でなくてはならない神でも佛でも眞實に君と合一した所に救済があるのだ其處まで行かなければ神の愛にしても佛の慈悲にしても感ぜられるはずはないよ、それにはもつと宗教の神聖な神秘な或る者にふれなければ駄目だそれは又君の考へてゐる様に簡單には行かないよ、よし君がキリスト教の様に満足しないから一切の宗教を否定して享樂的に人生を送らうなご、考へる事はこれ位大きい誤りはないよ』

『でもね……』

『でも君には信ぜられないとでも言ふのだらう君は眞に信じ様とせせずにか現象界の事物を肉眼を通して見、又直接皮膚によつて接觸し得

る様にすぐ神が信せられ神佛が救濟してくれる様に思ふがそれは實際如何程考へて見ても駄目だよ真に信じ真に救れるには君はもつと悩まねばならんよ真に悩む所に神佛の慈愛の光明がさすのだから悩まずして信仰を得やうとするのは丁度無條件で他人の物を譲り受ける様な物だ、而もそれが生命にも値する尊い物なのだから不可能だと言はねばならんね』

『では貴方は何宗教を信じよとお仰しやるの』と彼女の態度は物凄く程真剣味を帯びて来る

『いや僕は具體的にこの宗教を信じよとは云はぬ否言ひ得ないのだ神も佛も君の主観によつて存在し君を救ふのだからね唯僕は佛教を信じてゐる、その佛教の中の何宗を信じてゐるがその教義はかうだとか又あうだとかと云ふ説明位より出来んね』

と私は答へた先程から餘り知つた振りして突き込れたのだと感じたのでなるだけ淺薄にと答を努力した

『妾一度佛教に入らうかしら……』

と彼女は相談する様な目付で私を見る、こう彼女が出て來ては私も黙つてはゐられないので

『入らうかしらんでは駄目だ、君がもう一度宗教によつて慰められ復活し様とすれば、もつと強い悩みと炎ゆる様な信念の叫びを伴はねば結果は元に歸るよそれを伴はねば佛の存在も大慈悲圓滿鏡智も又その救濟も報ひられず再び宗教を呪ふ様な口吻を聞かねばならんからね』

『では又とくと考へて見ますわ』

『それも宜ろしいでせう、佛の光明を求めるとはもつと自己内省をやつて自己の愚にして罪障深き事を悟つて來給へ』

『何分宜ろしう御願ひしまわ……』と（彼女は打ちしをれて云ふた後で思ひ付いた様に）……では今夜は大部おそくなつたから歸りませう』

と彼女は獨言する様に言ひ終つて立上つた

『では歸らう、然し春江に僕の住所を通知しては困るよ實際春江が困るのだから』

と言ひ乍ら私も立上つて芝草の上を道路に歩み出た

『それは又別の話よ』

『いや君が又罪を作るから……………』

と私は反駁して見たが花代は何を考へてゐるのか黙々として歩みを續けて返事もしない、彼女の沈黙は又私に大きい悩みを興へた、今私が歩んでゐる道が悪からうがよし闇からうが私には問題でなかつた、今彼女は何を考へてゐるのだから、彼女自身の信仰問題か又は私の虚偽の言譯を疑つてどうかして通觀しやうとしてゐるのではないか、私は彼女の考へが後者でない事を願ひつゝ、又自己を責め且つ惱んだがそれを彼女の前に告白するだけの勇氣もなかつた、唯二人は黙々として死の世界の様な静寂の中を歩だ
彼女は電車に乗つて降るまで一言も發せず唯考へてゐた

『左様奈良』 『左様奈良』

これは唯彼女の下車の時の會話だ私はどうも彼女の住所を問はなかつた又彼女自身も告げ様ともしなかつた

彼女が下車した後の私は古傷を濯つた苦惱を痛

切に感せずには居られなかつた私は單に自己慰安の爲に

『今俺は何も考へる必要はないのだ唯過去を懺悔して彼女の前途を祝福してやればよいのだ彼女も今新しい翼を青い大空に向つて擴り將に飛ばんとしてゐるのだ、彼女の胸は新しい希望に横溢してゐるのだその華々しい途出の時によし彼女が過去を振り返つて見ても彼女の未來を遮る程大きい力はないはずだ、然し彼女は少なくとも俺の不道義的な行爲を恨んでゐるだらう、若し彼女がこの俺を恨む事によつて慰められ且新しい世界を創造する事が出来るのなら俺は甘んじて恨まれやう、それが俺の懺悔の道なのだ……………』

等と考へ私は自己の苦惱を抑へてゐた

七條内濱で電車を乗り變へて妙法院前の方に行く電車は靜かな鴨川の橋上を走る川の兩邊はクツキリと描れた繪の様に美しい遠く叡山には大きなアーチ燈が佛陀の光明の如く輝く……………